

## 様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年4月10日現在

研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2008～2009  
課題番号：20730140  
研究課題名(和文) ヒュームと18世紀啓蒙思想におけるマナーズ概念の分析  
研究課題名(英文) The notion of manners in Hume and the 18th-century Enlightenment

研究代表者  
壽里 竜 (SUSATO RYU)  
関西大学・経済学部・准教授  
研究者番号：20368195

### 研究成果の概要(和文)：

当該研究期間中に、①ヒュームのマナーズ概念が、彼の社会思想・政治思想・経済思想の根底を支えており、なおかつマナーズを規定する要因が唯一の原因に還元できないこと、②同時代の他の思想家に比べ、より社会科学的・客観的なマナーズ概念がヒュームの中に見られることを明らかにした。なお、具体的な研究成果としては、国際学会報告を2回(アイスランドと英国)おこない、国際学会誌への論文を1本発表した。

### 研究成果の概要(英文)：

Through this project, it was made clear, firstly, that Hume's social, political and economic thought were widely and profoundly underpinned by his notion and understanding of manners, and that the determinant factors of manners could not be reduced to any simple causes. And secondly, it was also observed that Hume tried to use this notion as a neutral and objective analytical tool for explaining the dynamic changes of social and historical phenomena, compared with other eighteenth-century Enlightenment thinkers. During the research term, I read two papers in international conferences and published one article in an international journal.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学説・経済思想

キーワード：社会思想史

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、18世紀のスコットランド啓蒙を代表する思想家、デイヴィッド・ヒュームのマナーズ（manners：生活様式・習俗などと訳される）概念の思想史的意義を検討するものである。18世紀において、ヒュームのみならず、モンテスキューやヴォルテールら、他の啓蒙思想家たちも、文明の指標を人々の習俗（生活様式）の洗練に求めた。この中には商業や学問・芸術の発達も含まれる。

だが、そもそもマナーズという概念そのものが細分化された学問体系をもつ現代人には把握しづらく、またその概念自体が十分に分析されていないため、18世紀啓蒙思想の歴史的研究は、啓蒙思想本来の総合的精神を十分に解明できていないのではないかと感じたことが本研究課題の背景にあった。これまでヒュームのマナーズ概念に着目した経済思想史研究はあったが、それは商業社会に特有の行動様式にのみ着目するものであった。それに対して、ヒュームや18世紀の思想家たちが用いたマナーズ概念はより多様であり、新たにマナーズ概念を分析の中心にすることで、これまで培われてきた国内外の思想史研究の成果を効果的に架橋することができると思われた。とくに、マナーズ概念の多様性を見出すには、哲学・宗教から道徳・批評、そして政治・経済・歴史にわたる幅広い領域で活躍したヒュームのような思想家を取り上げるのが適切である。そのため、マナーズ概念を中心に据えてヒューム思想を分析することは、啓蒙思想研究の一環としても、また、これまで培われてきた国内外の思想史研究の成果を効果的に架橋するうえでも、意義を有すると考えられた。

## 2. 研究の目的

いまだ経済学という学問そのものが確立していなかった当時において、マナーズ概念は大きな役割を果たしているにもかかわらず、従来のヒューム研究や18世紀の思想史研究では、現代の学問区分では政治学と経済学と（そうして倫理学などと）の間隙に位置していた。そのため、ヒュームを含めた当時の思想家たちによるマナーズ概念の位置づけを確定することを第一の研究目的とした。

第二に、本研究では、ヒュームのマナーズ概念が他の思想家のそれと、どのような共通点・相違点を持っているのか、その相違点はヒューム思想にどのような特徴を与えているのかを分析することを目的としていた。

具体的には、経済学との関連も視野に収めながら、あえて経済学史や経済思想史では取り上げられることの少なかった論点との関連を重視しながら研究をおこなった。たとえば、労働価値論とは異なるヒュームの主観的価値論の分析を通じて、習俗の変化による経済価値の変化という視点がヒュームに見られることを明らかにしようと考えた。また、人々の行為に現れた外面的なマナーズに加えて、より内面的な「意見」に着目し、ヒュームの「意見」概念を分析したり、マナーズの洗練に大きな影響を及ぼした騎士道について、ヒュームを中心とするスコットランド啓蒙の思想家たちの見解を明らかにしたりすることを本研究の具体的目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究では、ヒュームのマナーズ概念の分析を通じて、経済思想史における従来のヒューム像を再検討する。ヒュームのマナーズ概念は、主として経済学的な枠内で、すなわち近代文明社会における経済発展との関連で考察されてきた。しかし、ヒュームのみならず、多くの啓蒙思想家は、商業の変化のみならず、知識の進歩、厳密な法の執行など、様々な要素をマナーズという概念のもとに捉えてきたのである（フランスの啓蒙思想家も *moeur* や *manière* という二つの概念を用いている）。また、マナーズにより倫理的・宗教的な含意を持たせようとする著述家もいた。このように、多くの思想家が多様な意味で用いているからこそ、そこからそれぞれの思想家に特徴的な社会観を、総体的に分析することが可能になる。

ヒュームに関して言えば、ヒュームの政治思想や経済思想についての研究は、近年ますます活発になっているが、いずれも国制論や商業社会論といった形で、マナーズという概念がもつ豊かさを十分に分析しきれていない。ただし、国制論も商業論もマナーズと不可分の関係にある。ヒュームは国制や政体が国民の習俗に与える影響についても触れているし、商業の発展をマナーズの変化と捉えたのはヒュームのもっとも重要な貢献の一つである。したがって、本研究では、マナーズ概念をヒューム思想の分析の中心に据えることで、こうした従来の研究を統一的に発展させることを目指した。

従来、日本はヒューム研究の分野において、コンスタントに多くの成果を生み出してきた。また欧米でもヒュームの社会思想に関心

が集まりつつある。だが、いまだ経済学という学問そのものが確立していなかった当時において、マナーズ概念は大きな役割を果たしているにもかかわらず、現代の学問区分では政治学と経済学と（さらには倫理学などと）の間に位置しているのである。

とりわけヒュームのような多面的な思想家について、このような分析をおこなうには、経済思想史研究にウェイトをおきつつも、欧米の経済学史研究とは一線を画する日本の「社会思想史」の手法が最適だと考えられた。日本の社会思想史研究は、アダム・スミス研究における研究蓄積が示すように、道徳論や法学なども視野に入れた視野の広さをその特徴としている。

#### 4. 研究成果

平成 20 年には、アイスランドで開催された第 35 回 Hume Conference において“*The Philosophy of Our Passions*” in Hume’s *Economic Thought* という報告を行った。本報告は、ヒュームが情念論において、退蔵した貨幣になぜ人々は快を感じるのか、ということ考察しており、初期のヒュームにも経済現象への強い関心がうかがえることを論じるとともに、ヒュームの情念論を手掛かりに彼の価値論・外国貿易論・公債論の意義を考察したものである。従来のスミスマルクス研究では労働価値論の研究が蓄積されてきたが、ジョン・ロックからスミスにたる価値論系譜の中で、ヒュームが論じられることはほとんどなかった。だが、ヒューム自身は客観的価値論を批判し、主観的価値論を提示しており、ここに習俗の変化による商品価値の変化というヒューム独自の視点が現れていると考えられる。また、外国貿易論でも、スミスの主張とは異なり、ヒュームは外国貿易によって海外から珍しい物品がもたらされることで、人々の欲望が喚起される点を強調している。実は、『人間本性論』の中にも、人間がつねに外部からの刺激によって情念を喚起される（されねばならない）存在である、という人間観が示されている。こうした情念主導型の人間観のために、ヒュームは民主的な社会における公債問題について、非常に悲観的な見解を持たざるを得なかったと考えられる。従来は、ヒュームとスミスはともに経済的自由主義という点で同様の立場に立つとされてきた。また、スミスに先んずるヒュームは、経済思想という点ではスミスに及ばないとする見方もいまだに根強い。それに対して、本報告では、ヒュームとスミスとが異なる立場に立っていると考えられる点を積極的に取り上げた。そして、そうした相違点が生じてきた理由の一端を、ヒュームの情念分析に求めた。本報告に対して、思想

史研究者のみならず、哲学系のヒューム研究者から多くの好意的な質問を受けることができた。

また、平成 21 年にはスコットランドで開催された *Eighteenth-century Scottish Studies Society* の Hume as a Historian のセッションにおいて“*Opinion*” in Hume’s *History of England* というタイトルで報告をおこなった。この報告は、本研究課題におけるマナーズの分析の一環として、慣習のより内面的な表れとしての *opinion* に注目し、ヒュームの主著『イングランド史』において *opinion* 概念が果たす役割について論じたものである。ヒュームはこの著作の中で、人々の意見が時代を通じていかに大きく変化するかということを詳しく論じており、それを通じて、スチュアート王家（とくにジェームズ一世とチャールズ一世）をエリザベス以上の専制君主とするウィッグ史観を根底から覆そうとしている。ヒュームの主張によれば、エリザベス時代には人々が君主への絶対服従に対して何ら疑問を持っていなかったのに対して、ピューリタンの影響により自由・独立の気風が高まることで、従来通りの統治を続けたスチュアートの王たちがあたかも暴君であるかのように見なされるようになった、ということである。要するに、変わったのは、統治の基準ではなく、人々の意見なのだ、というのがヒュームの主張である。これまでも、そうしたヒュームの歴史家としてのスタンスは指摘されていたものの、本報告では「意見 *opinion*」の概念に注目することで、『イングランド史』におけるヒュームの主張をより明確かつ簡潔に示すことができ、さらには、それ以前に出版した『道徳政治論集』における諸論説と『イングランド史』との間に、多くの連続する議論があることを示すことができた。実際、ヒュームは初期の論考において「すべての統治は意見に基づいている」と主張していたからである。

さらに、同じく平成 21 年には、*Hume Studies* に“*The Idea of Chivalry in the Scottish Enlightenment: The Case of David Hume*”を発表した（雑誌の刊行年は 2007 年になっているが、実際の発刊は 2009 年である）。本論文ではヒュームを中心としたスコットランド啓蒙の思想家たちが、騎士道に対して必ずしも否定的な評価（野蛮な慣行）を下していたわけではなく、むしろマナーズの洗練の源泉とみなしていたことを明らかにしたものである。とくにヒュームの場合は、初期の草稿と考えられる「近代的名誉と騎士道に関する歴史的論考」があり、『イングランド史』でも騎士道文化について重要なコメントが残されている。だが、これらのコメントについては、これまで十分に検討されてこなかった。さらに、ジョン・ミラーやアダム・ファ

ーガソンといったスコットランド啓蒙の重要な思想家、ヒュームと並ぶ歴史家であったウィリアム・ロバートソンらの著作の中にも、騎士道をもたらした近代ヨーロッパ人のマナーズの洗練についての積極的な評価を多数見出すことができる。さらに、騎士道に対するはっきりしたネガティブな評価が登場するのは、フランス革命後の論争（とくにバークとペインとの論争）においてであることも明らかにした。マナーズ（生活様式）に関する議論はこれまでもヒュームの中心概念として様々に論じられてきたが、必ずしも経済的でも政治的でもない「騎士道」という概念に着目することにより、マナーズ概念がもつ文明論的意義を示すことができた。とくに騎士道独自（すなわち、ヨーロッパ独自）の行動様式として、とくに名誉と女性に対する慇懃な態度（gallantry）が、これらの思想家によってくり返し指摘されている点は重要である。実際、これらの特徴がギリシャ・ローマの遺産とどのような影響関係があるのか、あるいはゲルマン文化独自の特徴なのか、という点についても、その当時、活発な論争があったのである。つまり、騎士道という主題は、ヨーロッパ的アイデンティティの淵源に関わる重要な論争点であったことも明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

Ryu Susato, “The Idea of Chivalry in the Scottish Enlightenment: The Case of David Hume,” *Hume Studies*, 33:1(2007) pp. 155-178.査読あり

〔学会発表〕（計2件）

Ryu Susato, “‘Opinion’ in Hume’s History of England,” *Eighteenth-Century Scottish Studies Society* 2009年7月2-5日University of St. Andrews

Ryu Susato, “‘The Philosophy of Our Passions’ in Hume’s Economic Thought,” *The 35th Hume Conference*, 2008年8月7日Iceland, Hólar University

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

壽里 竜 (SUSATO RYU)

関西大学・経済学部・准教授

研究者番号：20368195